

平成 23 年 度

国 語 (マークセンス) 試 験 問 題

(人文・社会科学専攻)

(注 意)

1. 解答用紙に、例にならって受験番号を必ず記入すること。
2. 試験時間中は、すべて試験係官の指示に従うこと。
3. 解答方法

例

受験 番号	神奈川	理	1	2	3
----------	-----	---	---	---	---

氏名を記入してはいけない。

解答は、解答用紙に次の例にならって記入すること。

- ① 例えば、 と表示のある問題に対して(3)と解答する場合は、次の(例)のように解答用紙の の(3)の○にはっきりと×印を記入すること。

(例) (1) (2) (3) (4) (5)
 ○ ○ ⊗ ○ ○

- ② (3)に×印を記入したあと、(5)に解答を変更する場合は、次の(例)のように(3)の⊗をぬりつぶし、(5)の○にはっきりと×印を記入すること。

(例) (1) (2) (3) (4) (5)
 ○ ○ ● ○ ⊗

- ③ (5)に×印を記入したあと、再度(3)を解答とする場合は、次の(例)のように(5)の⊗をぬりつぶし、(3)の●のうえにはっきりと大きな×印を記入すること。

(例) (1) (2) (3) (4) (5)
 ○ ○ ⊗ ● ○ ●

- ④ ×印を記入しないものや、二つ以上記入したものは、誤りと同じに取り扱う。

掲載することができませんので、ご了承願います。この部分に記載されている文章につきましては、著作権上の問題から

掲載することができませんので、ご了承ください。 著作権上の問題から

この部分に記載されている文章につきましては、著作権上の問題から掲載することができませんので、ご了承ください。

この部分に記載されている文章につきましては、著作権上の問題から掲載することができませんので、ご了承承願いたします。

(富山英彦氏の『メディア・リテラシーの社会史』による)

* (注) マーシャル・マクルーハン——メディア学者。メディア研究の創始者とも言われる。

兜巾——修験者が被る小さな頭巾(ずきん)。

鈴懸——修験者が衣の上に着る麻の衣。

近衛文麿——政治家。昭和十年代には内閣総理大臣を務めた。「新体制運動」は、昭和十五年から敗戦まで、全体主義体制の強化を目指して実践された政治運動。

1

傍線部(1)～(5)までの漢字の読みとして、本文の論旨に照らして、誤っているものは次のどれか。

- (1) 氏 神——ウジガミ
- (2) 詣——マイリ
- (3) 法 螺——ホラ
- (4) 安 堵——アンド
- (5) 仔 細——シサイ

2

文中の空欄を補う語として、本文の論旨に照らして、最も適当なものは次のどれか。

- (1) 生成と解体
- (2) 認識と分析
- (3) 接触と伝達
- (4) 拡張と支配
- (5) 交流と継承

二重傍線部へ十津川での修験者たちの、メディアとしての機能の説明として、本文の論旨に照らして、最も適当なものは次のどれか。

- (1) 修験者たちは、熊野の山中に孤立した存在として外界のリアルタイムの情報を常に求めていたのであり、その存在は平安時代から近世までの封建的ムラ社会における数少ない情報の窓口となっていた。
- (2) 修験者たちは、伝統的な山岳信仰に基づく宗教的存在であったと同時に、当時都で政治的主導権を争っていた公家と武家の対立において公家方に加担する隠然たる政治勢力としても力を発揮していた。
- (3) 修験者たちは、十津川の住民にとって貴重な情報源であったが、彼らは非定住的な存在であったが故に、峻厳な地理的条件を越えて広い範囲に都の情報を伝えるという報道的役割を担うことができた。
- (4) 修験者たちは、その行程の途中で十津川郷に匿われた際に、都をめぐる政治的情報を現地の人々に伝達していたのだが、結果的にその情報は十津川の安全を保障するための重要な役割を果たしていた。
- (5) 修験者たちは、外部と隔絶した近世期の十津川郷に常に正確な情報を確実に伝える媒介者であったという点において、拡張する共同体意識を生み出す近代の新聞メディアと類似する特質を備えていた。

本文の論旨に照らして、最も不適当なものは次のどれか。

- (1) 明治以降、新聞は地方単位の限定的な情報メディアから全国規模の総合的な情報メディアへと自らを脱皮させていったが、その構造変容は、「日本」という共同体を想像力の中に創出しようとする近代日本の傾向と深く関わっていた。
- (2) 新聞というメディアは、「ここ」ではない「どこか」で起きた出来事を伝達し、地域の差異を超えて集団的想像力を生成する情報媒体であるが、そこではそれが発行されている地方の固有性が全く顧みられていないという訳ではない。
- (3) 近代日本の新聞が全国紙として拡張的に発展していった過程においては、「どこか」の情報を可能な限り即時的に収集して紙面に反映させるという目的を果たすために、新聞社の機構改革や統合、買取等の様々な動きが起こっていた。
- (4) マクルーハンが主張した「人間の拡張」は、自らが属する共同体と地理的に離れた外界との交流がメディアの発達によって容易になることで、人間存在における感覚的・制度的な変容が引き起こされるといふ事態を指す用語である。
- (5) 筆者は、情報メディアによって外界の情報を収集することが、近代国家制度の成立によって初めて重要なものになったその実例を、近代の新聞メディアの発達とそこでの「身体の拡張」といふ新たな社会的事態の内に見出している。

この部分に記載されている文章につきましては、著作権上の問題から掲載することができませんので、ご了承承願いたします。

掲載すること記載されてい文章につきましては、著作権上の問題から
掲載することができませんので、ご了承ください。

掲載すること記載されてい文章につきましては、著作権上の問題から
掲載することができませんので、ご了承ください。

この部分に記載されている文章につきましては、著作権上の問題から掲載することができませんので、ご了承承願いたします。

(多木浩二氏の『生きられた家』による)

* (注) オブジェー——物体、対象。

フランシス・イエイツ——イギリスの思想史学者。主にルネサンス期のヨーロッパ精神史を研究した。

アウグスチヌス——キリスト教の神学者・哲学者。

エレン・イーヴ・フランク——文学と建築の関係を考察した研究者。

ブルジョアジー——富裕な資本家階級。

サロン——貴族や上流階級の社交のための場所。

5

傍線部の片仮名(1)～(5)にあてはまる漢字として、本文の論旨に照らして、誤っているものは次のどれか。

- (1) 知 解
- (2) 内 密
- (3) 払 飾
- (4) 亀 裂
- (5) 折 衷

6

本文中の空欄

A

に入る一節として、本文の論旨に照らして、最も適当なものは次のどれか。

- (1) 歴史を建築との関係で読みかえること
- (2) 人間を家族との関係で捉えかえすこと
- (3) 起源を現象との関係で掘りおこすこと
- (4) 現在を過去との関係で問いなおすこと
- (5) 未来を現実との関係でえがき出すこと

〈家〉に関する本文中の説明として、本文の論旨に照らして、最も不適当なものは次のどれか。

- (1) 家とは、住人の生活や意識などの歴史性を人類の集団的な記憶として昇華した上で意味化する貯蔵庫である。
- (2) 家とは、住人の記憶のみならず、過去の人間存在に纏わる歴史的なかたちを総合的に収集した宝物殿である。
- (3) 家とは、住人が生きることの意味をその歴史化されたオブジェに見出すことのできる、生の記録の場である。
- (4) 家とは、長い年月の間にその住人の歴史的な記憶を蓄積させてゆくという、現在と過去が共存する場である。
- (5) 家とは、それを生み出してきた住人の存在の痕跡を、いわば無意識の内に秘めている多元的テキストである。

本文の論旨に照らして、最も適当なものは次のどれか。

- (1) 空間の中に社会やその慣習を形象化した装置としての建築は、近代文明の母胎であるヨーロッパ文化に固有の文化形態であるが、それは人間存在の意味を翻訳された隠喩として象徴化するという記憶術の一種でもあった。
- (2) モダニズムとは、前近代社会を特徴づけた家父長制度のような封建的社会体制を打破し、様式を一元化したシンプルな建築様式において過去の時間を新たに象徴化するという、人間存在をめぐる再構造化の志向であった。
- (3) 既存のコンテクストを捨象して「ゼロからはじめる」という近代の主題は今や相対化されており、記憶の存在を許容しつつ、過去と現在との相互的な関係を建築において多元的に表現するという傾向が新たに生まれている。
- (4) 筆者が幼少の頃抱いていた家のオブジェに対する感覚は、アウグスチヌスにおける記憶の隠喩としての建築観と通底するものであり、そこでのオブジェは過去から切り離された未知の象徴としての存在感を発散していた。
- (5) 先祖の肖像画とは、家族における「時間の鏡」でありその自己同一性の源泉でもあったが、写真がその役割に取って代わったことにより、家族の歴史をめぐる記憶は人間の個人史における重要性を喪失することになった。

内の樂を本とし、耳目を以て外の樂を得る媒としてその欲になやまされず、⁽¹⁾天地万物の景氣のうるはしきを感じればそのたのしみ限なし。この樂朝夕常に目のまへにみちみちて余あり、これをたのしめる人は則^{すなわち}山水月花の主となりて人に乞ひもとむるに及ばず、財もて買ふにあらざれば一錢を費さず、心にまかせてほしるままにとりて用ふれども尽きず、常にわが物として領すれども人叱はず。如何となれば山水風月の佳景は固より定れる□なければなり。かく天地のうち窮なき樂を知りてたのしめる人は富貴の驕樂を羨まず、そのたのしみ富貴にまさればなり。この樂を知らざる人はたのしむべき事目の前に常にみちみちて多けれど、その樂を知らざれば樂まず、世俗のたのしみはそのたのしみいまだやまざるにはやく我が身のくるしみとぞなれる、譬へば味よき物を食りてほしるままに飲み食へば始は快しといへどやがて病起り身のくるしみとなるがごとし。

凡^{およそ}世俗のたのしみは心を迷はし身を損ひ人を苦ましむ。君子のたのしみは迷なくして心を養ふ。外物を以て言はば⁽²⁾月花をめで山水を見風を吟じ鳥をうらやむの類、⁽³⁾その樂淡ければ終日たのしめども身に禍なく人のとがめ神のいさむるわざにあらず。このたのしみ貧賤にしても得やすく後の禍なし。富貴の人はその奢り怠りにすさみてこのたのしみを知らず、貧賤の人はこの二の失すくなし。志だにあればこの樂を得易し。

* (注) 景氣——景色。

(貝原益軒の『楽訓』による)

9

傍線部(1)の内容に関する説明として、本文の論旨に照らして、最も適当なものは次のどれか。

- (1) 精神的な楽しみは、物質的な楽しみに比べて淡泊なもので、その満足を得た人のことを羨むこともない。
- (2) 風景の美を感じる内面を持てば、植物の生命の美を発見できるので、風景に感動する楽しみには限りがない。
- (3) 風景は、自分の都合でいくらでもその内容を自由に解釈できるから、風景に感動する楽しみには限りがない。
- (4) 風景を楽しむことは、心の迷いから人を解き放ち、心身を苦しめることがなく、その楽しみには限りがない。
- (5) 風景はその人の心の関心や志向に関わらず平等に存在するので、風景に感動する楽しみには限りがない。

10

空欄を補う言葉として、最も適当なものは次のどれか。

- (1) 楽
- (2) 主
- (3) 限
- (4) 心
- (5) 富

11

次の俳句の中で、傍線部(2)に最もあてはまらないものは次のどれか。

- (1) 名月や池をめぐりて夜もすがら 芭蕉
- (2) 牡丹散りて打ち重なりぬ二三片 蕪村
- (3) 我と来て遊べや親のない雀 一茶
- (4) 一群の鮎眼を過ぎぬ水の色 子規
- (5) 遠山に日のあたりたる枯野かな 虚子

傍線部(3)「後の禍」の例として、最も不適當なものは次のどれか。

- (1) 楽しみ過ぎて人から非難される。
- (2) 楽しみ過ぎて貧しくなってしまう。
- (3) すぐに楽しみが終わってしまう。
- (4) 他人から楽しむ様子を妬まれる。
- (5) 楽しみを貪る余り健康を損なう。

宋人に好んで仁義を行ふ者有り、三世懈らず。家に故無くして、黒牛白犢を生む。以て孔子に問ふ。孔子曰く、此れ吉祥なり。以て上帝に薦めよ、と。居ること一年、其の父故無くして盲す。其の牛又復白犢を生む。其の父又復其の子をして孔子に問はしむ。其の子曰く、前に之を問ひて明を失へり。又何をか問はんや、と。父曰く、聖人の言は、先に迂ひて後に合す。其の事未だ究めず。姑く復之を問へ、と。其の子又復孔子に問ふ。孔子曰く、吉祥なり、と。復以て祭らしむ。其の子帰りて命を致す。其の父曰く、孔子の言を行へ、と。居ること一年、其の子又故無くして盲せり。

其の後、楚、宋を攻めて其の城を囲む。民、子を易へて之を食ひ、骸を析いて之を炊す。丁壮なる者は、皆城に乗りて戦ひ、死する者大半なり。此の人、父子疾有るを以て、皆免る。囲みの解くるに及んで、疾俱に復せり。

〔列子〕による

* (注) 犢——子牛。

上帝——天上に存在すると信じられた万物の主宰者。天帝。

薦——献上する。

丁壮——力役に耐える男子。

13

傍線部(1)の原文として最も適当なものは次のどれか。

- (1) 其父又復令其子問孔子
- (2) 其父又復被其子問孔子
- (3) 其父又復其子而問孔子
- (4) 其父又復為其子問孔子
- (5) 其父又復使問其子孔子

14

傍線部(2)は(A)誰に(B)何をもって祭るように指示したのか。最も適当な組み合わせは次のどれか。

- (1) (A) 其の父 (B) 上帝
- (2) (A) 孔子 (B) 黒牛
- (3) (A) 其の子 (B) 白犢
- (4) (A) 孔子 (B) 上帝
- (5) (A) 其の父 (B) 黒牛

15

本文の趣旨に添う格言として最も適当なものは次のどれか。

- (1) 人間一生、夢の如し
- (2) 福過ぎて禍生ず
- (3) 人間到る処、青山あり
- (4) 禍を転じて福と為す
- (5) 人間万事、塞翁が馬